

その後の月報にむけて

大西勝明

「月報400号」に寄稿をということで「社会科学研究所四〇年史」ひもといてみた。第一号は1963年に発行されている。小生が生田の丘に最初に立ったのが1962年で、その約10年後オイル・ショックの1973年の117号に初めて技術発展についての寄稿をしている。そして、その後の過程は当然のことながら世界同時不況を経ての激動の日本経済に重複することになるが、月報と一緒に生きてきた奇妙な自分の人生に驚く。昨年まで第二次世界大戦後日本産業の50年を総括する作業に加わってきたが、はからずも、今年また、自己の研究史に重なる月報の30余年に思いを馳せることになった。たったいまも、前線で研究を続けている積もりでいるが、いつのまにか老い、明日よりも過去の広がりが大きくなってきている。

月報リストを見ていると亡くなった友人が忍ばれるし、編集担当をやり物議をかましたことが思出される。そして、もう外出に自信がなくなったとされながらも現在もお執筆に固執される恩師の名前には圧倒されそうである。加えて、これも最初のはなしになるが、『三枝博音と鎌倉アカデミア—学問と教育の理想を求めて—』（中公新書：1996）を見つけ手にしてみると、やはり恩師故菅井準一が紹介されていた。日常生活の深みと厳しく対峙し、現実生活と取組み、激しく対話しながら思想すること、常に自己と戦い、環境と戦う明朗な懐疑的主体であること、真摯な知性であることを主張しているのである。温和であった恩師の壮絶な科学への思いを再発見した気になった。

30年間、激動の日本と並進してきた400号にいたる膨大な月報のバックナンバーは壮観である。そして、そのことを支えてきた精神は、荘厳で孤高でさえある。そうではあるが、月報を産出し続けてきた知的エネルギーや月報に秘められた崇高な精神の継承については自信がない。だが、もはや30年などはとても残されてはおらず、過去の歴史に陶醉している余裕さえない気がする。ただ、継承すべき精神の所在と体系を持たない現状分析や現状分析に基づかない理論研究への不満は確認してある。国際的な規模で激変をとげている社会のひだに抜くことの出来ない楔を打ち込むことが、月報に関係をもったものの仕事かなどと考えている。